

2012/06/30 作成

シンガポール国立大学派遣交換留学終了報告書

国際開発工学専攻 修士 2年

加藤 智明

1. 留学先大学の概略

シンガポール国立大学(National University of Singapore)はシンガポール唯一の国立総合大学である。計 17 の Faculty と School から成り、約 37,000 人の学生が学んでいる。国際色が強いのが特長で、アジア地域以外にも、欧米、南米、アフリカなどの 100 か国以上から学生が集まっており、約 3 分の 1 が留学生である(東工大は 10 分の 1 程度)。交換留学プログラムも充実しており、世界約 40 か国、約 300 の大学と協定を結んでいる。各種大学ランキングでも、世界的に高く評価されている。

2. 留学前の準備

在学期間を半年か 1 年延長する予定でいたので、就職活動に関しては何もしていない。論文については、留学中に研究するつもりであったが、それが帰国後の修士論文につながっていくかは成り行き次第と考えていた(結果的には、修士論文は留学中の研究とは別テーマになった)。出発の数か月前から、日本の指導教官を通して、紹介してもらった留学先の指導教官とメールで連絡を取り、受け入れの了解を得た。

留学先の情報は、インターネット上にある情報を収集すると共に、過去に留学した先輩にも話を聞いた。住居は、交換留学生用にオンラインで申し込むシステムがあり、それを利用した。運が悪いと、学外の寮に住まざるを得ないらしいが、私の場合は希望していた寮に入ることができた。ビザに関しては、渡航後に手続きを行うのが通例である。

シンガポールの公用語は英語なので、語学の準備は英語しかしていない。標準中国語やマレー語も広く話されているが、英語が話せれば基本的に生活に支障はない。英語は、TOEFL に向けて勉強した他、研究室の留学生との会話を通じて上達を図った。

3. 留学中の勉学・研究

前期は、Faculty of Arts and Social Science から授業を二つ履修(Geography of Development, Transport Economics)、二つ聴講(Development Economics, Econometrics)した。授業は、講義とチュートリアル(少人数で双方向の授業形式)から構成されており、チュートリアルではディスカッションやグループワークが多く、語学のハンデもあり苦勞した。研究の方は、指導教官と二週間に一度くらいの頻度で打ち合わせを行い、研究のテーマ、手法や方向性を決めた。NUS では、修士学生には研究室のデスクが与えられないので、作業は主に図書館で行った。

後期は、研究に多く時間を充てるため、授業は聴講を二つ(Nation Building in Singapore, Japan and Singapore)に抑えた。指導教官との打ち合わせは週に一回程度で、ほとんどの時間は図書館で作業していた。ちょうど、研究テーマに関係のある国際学会の発表用論文の提出締切が5月初旬で、学期終了の時期と同じだったので、これをゴールに設定して研究を進めていった。

4. 留学中に行った勉学・研究以外の活動

Recess week と呼ばれる学期中の10日程度の休みや、学期間の休み、時には週末などにも空いた時間があるときには、旅行をすることが多かった。シンガポールは地理的・空路的に東南アジアのハブなので旅行をするにはとてもいいロケーションである。東南アジアを中心に約10か国旅行した。もともと旅行をするのが好きなので、とても楽しめたし、色んな国を見て回れたのはいい経験になったと思う。

5. 留学費用について

JSPS の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムから、月12万×10か月と渡航費補助を頂いた。シンガポールの物価は基本的には日本の7割程度なので、上記の金額は生活していくのに十分な額であった。

6. 留学先での住居について

留学期間中はずっとキャンパス内にある Prince George's Park Residence という寮で生活していた。ここだけで約3000人を収容できる大規模な寮であるが、非常に留学生が多い大学なので、この寮以外にも多くの寮をキャンパスの敷地内で提供している。申込みは渡航前の手続きの段階で、オンラインで行う。

私が生活していた寮は、敷地内にスーパーマーケット、レストラン、フードコート、スポーツ施設などがあり、寮から出なくても生活できるほど設備が充実している。部屋はいくつかタイプがあるが、私の場合は、一人部屋にベッド、デスク、ファン、クローゼット、洗面台があり、キッチン、トイレ、シャワーは 15 人程度のフロアメイトと共有する。フロアメイトの国籍は、中国、インド、マレーシア、バングラデシュ、韓国、フランス、ドイツ、フィンランド、イギリス、スウェーデンととても多様であった。

7. 留学先での語学状況

先述したように、シンガポールでの生活は、学内外問わず英語が出来れば事足りる。実際に行ってみたところ、シンガポール人はシングリッシュと呼ばれる独特のアクセントで早口に話すし、授業のディスカッションなどでも他の英語ネイティブの国の学生が多く、苦勞する場面は多々あった。日常生活でのコミュニケーションは、留学前にある程度慣れているつもりであったが、実際のところは他国の留学生とのレベルに乖離があり、少々気落ちした。ただ、今回の留学を通じて日常的なコミュニケーションに関しては成長があったように思う。

8. 単位認定、在学期間について

留学前にほとんど必要な授業数を取っていたので、単位認定の申請は行っていない。在学期間は進路を考慮して、半年か1年延長する。

9. 就職活動について

在学期間を延長するので留学前に特に準備などは行っていない。

10. 留学を希望する後輩へアドバイス

私のように日本で生まれ育った人が多いと思いますが、特にそのような人にとっては海外に長期滞在する経験はとても意味のあるものになると思うので、積極的にトライすることをおすすめします。感じること、得られるものは人それぞれで、必ずしもポジティブな体験ばかりではありませんが、挑戦する価値は十分にあると思います。ただ、行く前に交換留学を自分の人生の中でどのように位置づけるのか、ということをよく考える作業は行っておくべきです。その際に、過去に経験のある人から色々と率直な話を聞いておくのが、とても重要だと思います。